

2016 年度秋季大会（関西大学）の記録

関西大学 高屋定美

2016 年度日本金融学会秋季大会が 10 月 15・16 日に関西大学千里山キャンパスで開催された。大会実行委員長には、筆者が務め、プログラム委員会委員長には栗原 裕愛知大学教授にお引き受けいただいた。プログラム委員には、次の会員諸氏にお願いした。宇恵勝也(関西大)、大野早苗(武蔵大)、岡村隆(関西学院大)、川崎健太郎(東洋大)、北坂真一(同志社大)、北野重人(神戸大)、栗原裕(愛知大)、佐藤政則(麗澤大学)、鎮目雅人(早稲田大)、須齋正幸(長崎大)、高橋豊治(中央大)、竹中正治(龍谷大)、田村香月子(関西大)、茶野努(武蔵大)、敦賀貴之(京都大)、中川竜一(関西大)、西山慎一(東北大)、林康史(立正大)、兵藤隆(山口大)、藤原賢哉(神戸大)、丸茂俊彦(同志社大)、矢後和彦(早稲田大)、家森信善(神戸大)(敬称略、所属は当時)。

当日、約 300 名の研究者ならびに金融関係の実務家も参加し、活発に議論が行われた。また一日目夕方には、大会会場近くの関大生協において懇親会も開催され、約 110 名の会員が参加して交流が深められた。

今回の大会の特徴としては、全体を通じてデフレ脱却のための経済政策に関するテーマと、中国経済のリスクに関するテーマがあったことである。前者に関して中央銀行パネルにおいて日本銀行が採用しているマイナス金利政策の評価が議論された。さらに共通論題では高橋是清の経済政策に焦点をあてて、歴史から何が学べるかといった議論が行われた。また後者に関しては、国際金融パネルでの資金フローへの分析と特別セッションでの中国リスクに関する分析が報告・議論された。以下では、各パネル、特別セッション、そして共通論題に絞って紹介する。

国際金融パネルでは、竹中正治氏(龍谷大学)が座長をつとめ「国際マネーフローの変調と新興国債務問題」というテーマに沿って、佐久間浩司氏(国際通貨研究所)、岡寄久実子氏(キヤノングローバル戦略研究所)、北野重人氏(神戸大学)の 3 氏から報告があった、また星河武志氏(近畿大学)が討論者をつとめた。

このセッションでは中国経済の失速、天然資源価格の急落、米国の利上げなどの懸念により国際的なマネーフローは新興諸国から流出基調を強めており、それはまた世界経済・金融の不安定要因となっている。そのような国際マネーフローに関しての報告が行われた。それらの報告では現在のリスクの所在と、今後の展開も議論され、また新興国市場を巡る資本規制政策の研究動向にも言及された。

中央銀行パネルでは「マイナス金利政策の評価」とのテーマに沿って宮尾龍蔵氏(東京大学)が座長をつとめ、本多佑三氏(関西大学)、櫻川昌哉氏(慶應義塾大学)、竹田陽介氏(上智大学)の各氏が報告を行った。マイナス金利政策による設備投資や住宅投資の増加、また通貨安といった正の効果ともに、バブルへの懸念や銀行収益へのマイナスの効果、また動学的

非効率性の可能性などのデメリットも指摘された。そのデメリットが大きいと評価する立場からは、金利正常化の方向性も示された。

特別講演では、森信親金融庁長官が詳細な資料に基づき、「金融行政の現状と課題」というテーマで講演をなさった。その中で金融行政運営の基本方針、現在の金融機関の動向、地域経済活性化支援機構の機能、そして金融庁による金融行政の方向性など、最近の金融行政に関わる事項が論じられた。

今回の学会では特別セッションとして、「中国リスクと金融市場」というテーマを設定した。そのセッションでは、筆者が座長を務め、童適平氏(獨協大学)、西村陽造氏(立命館大学)、李立栄氏(野村資本市場研究所)、福光寛氏(成城大学)が報告を行った。当時、懸念が高まっている中国の金融市場・経済に関する詳細な報告と、その報告に関して丁寧な討論が行われた。中国国内経済のリスクの高まりには様々な見解があり、またそのリスクの国際的な波及も拡大するという意見、それとは反対に限定的であるという見解も紹介された。また、その当時のシャドーバンキングの拡大に対しても規制強化によってその発展を阻害せず成長を期待するという意見と、それとは逆に消費者保護の観点から規制を強化すべきとの意見が披露された。

大会2日目の共通論題では、「われわれは高橋是清から何を学ぶのか」というテーマの下、鎮目雅人氏(早稲田大学)を座長とし、岩田規久男氏(日本銀行)、松元崇氏(第一生命経済研究所)、佐藤政則氏(麗澤大学)が研究者の立場からそれぞれ報告した。これに対して、伊藤正直氏(大妻女子大学)、飯田泰之氏(明治大学)が討論を行った。

ここでは、高橋是清が行った財政政策だけでなく、日本銀行(副)総裁としての役割にも言及され、「高橋財政」が財政政策だけでなく、為替政策、金融政策、財政政策を含むマクロ経済政策の総体として理解されることが強調された。また近年の高橋財政に対する実証研究も紹介され、当時の経済政策を現代的視点からの検証が試みられた。

大会では上記の他、4会場に分かれて11セッション、32報告による質の高い自由論題報告がなされ、多くの会員がセッションに参加した。本大会での貴重な報告、議論が学会内外で参考になることに期待したい。

最後に、大会が無事滞りなく終了したのも、準備委員会・プログラム委員会等の会員、そしてお手伝いいただいた関西大学に当時在籍していた学生諸君のおかげである。ここに記してお礼を申し上げたい。

(高屋定美「学会だより」『月刊金融ジャーナル』2016年12月号,pp.36-37より引用)

文責：高屋定美(関西大学、大会準備委員会委員長)



大会が開催された関西大学第2学舎第2号館ビル